

## 協働するタイ人学生と日本人学生の間で起った ピア・ラーニング

—対等性を意識した場作り—

松井 育美

### 要 旨

本稿は、SENDプログラムにおけるタイ国・チュラーロンコーン大学のタイ人学生と早稲田大学の日本人学生との交流活動の報告である。活動はチュラーロンコーン大学の日本語主専攻の通常授業において行った。活動報告には前年度の同プログラムの活動からの課題に起因する事前の取り組みも含めた。活動内容は教室でのタイ人学生と日本人学生の協働とピア・ラーニング、活動後に起ったタイ人学生同士のピア・ラーニング、加えて個々の学生に起った変化について述べた。活動後のアンケートを分析し、今後の活動への課題を考察した。

### キーワード

協働 ピア・ラーニング 対等 共有

## 1. はじめに

筆者は当大学でのSENDプログラムの受け入れ初年度である2013年度より担当科目において交流活動を引き受けている。初年度は、双方の学生に事前に活動内容を知らせ、共有させた上で活動初日を迎えた。学生たちは初対面であるにも関わらず、すぐに打ち解け、活動もスムーズに進み、最終日の発表も双方にとって充実したものだったと見受けられた。活動後のアンケートでは双方で「またこのようなプログラムに参加したい」、「交流できて良い経験だった」などのポジティブな回答が圧倒的に多かった。一方で、タイ側では「(日本人学生に)たくさん手伝ってもらった」、「お世話になってありがとう」など、「日本人学生にしてもらったことへの感謝」も少なくなく、そこには「タイ人学生が日本人学生に教わる」という状況がそれぞれのグループで展開されていたことが想像された。日本側では、ほぼ全員から「次はお互いの協力で何か作り上げたい」など次回への課題と取れる回答があった。そこで、今年度は「日本語を学ぶタイ人学生」と「日本語教育を学ぶ日本人学生」が互いに学びあう場だということをより意識し、より対等に交流できる活動にしたいと考えた。そして、担当教員として事前に双方に関われるという立場を生かし、交流活動の内容を知らせるだけでなく、活動の事前の取り組みに積極的に関与することにした。前年度にあったタイ人学生が日本人学生に何かしてもらおうという一方向の流れを双方向にしたいと考えた。

## 2. 活動報告

前章で述べたように今年度の交流活動は、前年度からの課題を引き継ぐものであり、双方の学生たちが参加する交流活動前の教師（筆者）の取り組みも活動に含み報告する。

### 2.1 活動概要

本交流活動の対象は、本大学文学部東洋言語学科日本語講座の日本語主専攻2年生（タイ人学生）35名と早稲田大学 SEND プログラム派遣の日本人学生7名（大学院生2名、大学生5名）である。タイ人学生の日本語レベルは日本語能力検定 N2 程度であった。活動は本講座2年生の必修科目「日本語会話1」で行った。教室ではタイ人学生を日本人学生数のグループに分け、グループごとに日本人学生が1人入ってロールプレイなどをした。

### 2.2 前年度の課題と今年度の活動前の取り組み

前年度の交流活動はプログラム初年度としては良好な結果をもたらしたが、タイ側の「教えてもらった」という一方向的な要素の存在も否めなかった。しかし、活動後のアンケートでは、日本人学生からは「お互いの協力で何かを作り上げたい」などの回答があり、対等な立場での活動を望んでいることがわかった。一方、タイ人学生からの回答も「もっと時間がほしい」、「もっと話したい」など、日本人学生ともっと交流したいという気持ちが表れたものが多く、これらも対等な立場での日本人学生との活動を期待するものと解釈した。そこで、筆者は今回の交流活動に期待することとして以下の2つのことを強調した。

①「タイ側は日本語、日本側は日本語教育を専門分野として学ぶ学生であり、一方的に

どちらかが教わるのではなく、お互いの目指す分野を支えあい、対等な立場で学ぶ」

②「海外の大学の日本語学習者のことを日本語教育を学ぶ日本人学生によく知ってもらう」

また、本学のタイ人学生には、このような交流活動は今までなく、遠慮せず積極的に何でも話してみようと加えた。当初、あまり反応はなかったが、授業中のやりとりの中で繰り返し話題に出していると、彼らの「教えてもらう」という意識が「日本人と活動する」という方向に少しずつ変化していくのを感じた。一方、日本人学生にはまずメールで、来タイしてからは打ち合わせの中で伝えた。以下、活動までの双方の取り組みを述べる。

#### 2.2.1 活動2カ月前

日本側では派遣メンバーが決定され、代表の大学院生から事前準備を問うメールが来た。そこで、2.2 で述べた「この交流活動に期待すること」を説明、共有した。具体的な活動内容についてはタイに到着してから打ち合わせることとし、こちらの授業でのコンセプトである「協働」や「ピア・ラーニング」について学んでおいてもらえたらありがたいと返信した。後に出発前の派遣メンバーによって、自主勉強会が始まったという報告を受けた。このような勉強会は事前の取り組みとして高く評価したい。一方、タイ側は学年末の長期休暇中であり、タイ人学生たちへの説明と共有は約2カ月後の新学期明けとなった。

#### 2.2.2 活動2週間前

タイ側である本大学の新学期が始まり、タイ人学生に本交流活動について説明し、第2章で述べた「この交流活動に期待すること」を共有した。特に日本語教育を学ぶ日本人学

生にとっても海外の大学での日本語学習者と話すのはとても貴重な経験になるということを確認し、日本語ネイティブに対して臆したり、遠慮したりする気持ちを払拭しようと考えた。同時に、今の東南アジアやタイ、本大学のことをよく知ってもらう機会にしようということも盛り込んだ。これらの事前の取り組みは、その後の交流活動におけるタイ人学生たちの言動や行動をより積極的にするのに大きく影響したと感じた。

### 2.2.3 活動前日

活動前日になり、本交流活動の受け入れ科目の授業活動で問題が起きた。タイ人学生たちから教師（筆者）宛にメール本文が何もない Word ファイルが多数届いたのだった。後に確認すると、彼らにとってそれらのことは経験がなかったと判明した。メールでの Word ファイルの提出は今後頻繁にあるので見過ごすことはできないが、翌日は活動の初日であり、それをどう扱うかを思案した。結果、偶発の問題であるが、「教師へのメール」という必要性和実用性から本交流活動の課題として適当と判断し、活動冒頭のトピックとすることにした。日本人学生側には起ったことを説明し、問題を共有した。彼らに事前準備の時間はなかったが、「教師へのメール」は日常的なものということから対応可能と判断した。

## 2.3 教室活動とその後

前の3つの項で述べたような経緯を経て活動初日を迎えた。双方の簡単な自己紹介の後、それぞれのグループに分かれ活動を開始した。最初のトピックは 2.2.3 で述べた「教師へのメール」である。以下、教室内で起ったこと、その活動から後に表出したことを述べる。

### 2.3.1 教室で起った「協働」

タイ人学生が 2.2.3 で述べた「教師へのメール」について質問し、日本人学生が答えるという形で活動が始まった。以下の会話はあるグループでのやりとりである。

(T1、T2、T3：タイ人学生、J：日本人学生)

- |   |   |
|---|---|
| ① | T1：先生に Word ファイルを出すとき、どうしたらいいですか。         |
| ② | J：出すとき？ファイルのこと？付けるメールのこと？                 |
| ③ | T2：いくみ先生は「問題です」と言いました。何ですか。               |
| ④ | J：ああ、それはたぶん添付文のことかな。                      |
| ⑤ | T2：何ですか。                                  |
| ⑥ | J：ファイルとか送るときに付けるんだけど...                   |
| ⑦ | T1：ああ、いつも付けますか。                           |
| ⑧ | J：いつも付けますよ。先生だけじゃなくて、友だちにも。タイ語だと付けないんですか。 |
| ⑨ | T1,T2：んー...                               |
| ⑩ | T3：xxx (タイ語)？                             |
| ⑪ | T1,T2：あー、xxx、あります。                        |
| ⑫ | J：それって、どんな感じなんですか。                        |

図1 教室でのメール本文についてのやりとり（筆者の当日メモより抜粋）

松井先生、

お世話になっております。1組の〇〇（学生の名前）です。

この前、1組のまとめノートをお送りした時、失礼な形で送ってしまい、

本当に申し訳ありませんでした。

これから気をつけます。

〇〇（学生の名前）

図2 交流活動後に筆者に送られてきたメール（実際のメールより筆者抜粋）

図1では「教師へのメール」についてT1とT2は質問しJから答えを得た(④)。続くJからの質問にはT1らタイ人学生3人で答えた(⑩、⑪)。つまり、T1とT2はT3と「協働」することによりJの質問に答えられた。これらのやりとりは、タイ人学生と日本人学生が「協働」する中で互いに学びあった「ピア・ラーニング」の表れである。

### 2.3.2 活動後に表出したもの：教師へのメール

図1のようなやりとりが教室で繰り返され、後日提出されたWordファイルには図2のメール本文があった。その前週にはなかったことから、クラスとして明らかな進歩であった。後にタイ人学生たちに聞いてみると、「(日本人学生が)実際に使っていると聞いて、(自分も)使いたいと思った」などと返ってきた。それぞれのグループで活動中に作成した「教師へのメール」を活動後クラス全員で共有し、教師(筆者)へのメールとして使用したという。タイ人学生のこれらの行動は、タイ人学生同士の「ピア・ラーニング」である。

### 2.3.3 それまでの教室になかったもの：個の学生に起った変化の例

前述の2.3.1と2.3.2のほかに起ったそれまでの教室になかったものとして、「個々の学生に起った変化」がある。その例としてタイ人学生側の女子学生Aさんの場合を挙げる。Aさんは日本語能力検定N2保持者であるが、性格は控えめでクラス内では目立たない存在だった。偶然の順番で、日本人男子学生Bさんと「友人の誘いを断る」というロールプレイを全員の前ですることになり、Aさんは「友人に誘いを断られる」、Bさんは「友人の誘いを断る」ロールとなった。クラスでは日本人男子学生Bさんの「ごく自然な誘いの断り方」に期待が集まったが、実際に繰り返されたのは、誘いをやんわりと断ろうとしたBさんをAさんが厳しく問い詰め、当初の設定「友人同士」は「夫婦」となり、やりとりの焦点は「妻」Aさんの誘いを断った「夫」Bさんの「浮気を疑う」というストーリーになり、普段のAさんを知るタイ人学生のみならず、皆が忘れられないロールプレイとなった。活動後のアンケートの回答から類似の例がいくつも起っていたことがわかった。これらの変化は本交流活動の中で起ったことであり、日本人学生にとっても設定を超えてのロールプレイの展開は印象に残ったようであった。

## 2.4 活動後のアンケート

活動後、双方にアンケート調査をした。そのうち①交流活動の感想、②自分にとってよかったこと、③次回したいことについての主なコメントを以下にまとめる。

表1 活動後のアンケートでの主なコメント

	タイ人学生	日本人学生
①	直接、話せてよかった/楽しかった/よい経験になった/意見交換ができてよかった/日本人と交流ができた/時間が短かった/話すチャンスが少なかった/もっと話したかった	内容が濃かった/積極性に驚いた/日本語を日本語で説明する難しさを感じた/日本語のレベルの高さに驚いた/日本を見直すきっかけになった/ネガティブな学生がいなかった
②	日本人と日本語で話した/交流できた/同世代の日本人と知り合えた/意見交換ができた/使った日本語にコメントをもらった/テキストに載っていない日本のことが聞けた/	ピア・スタイルを経験できた/意欲の高さに刺激を受けた/日本語教育の経験ができた/日本語学習への積極的な姿勢に胸打たれた/自分の使っている言葉を見直すきっかけになった
③	もっとタイのことを紹介したい/いろいろな活動がしたい/日本語で案内したい	共同発表/共に何かを作りたい/自分から踏み込める活動/今回のような活動

以上、①ではタイ側では日本語使用や、日本人学生との接触、活動時間に関するものが多く、日本側では日本語使用やタイ人学生の姿勢に関するものが多く、双方の積極的な姿勢が表れている。②ではタイ側は①と同様日本語使用に関するものが多く、日本側では自身への刺激などが多かった。一見異なる分野のようだが、俯瞰してみると、それぞれの専門分野につながることであり、これらも積極的な活動への取り組みの表れと解釈した。③ではタイ側では、「もっとタイのことを紹介したい」、日本人側では「共同発表」、「共に何かを作りたい」など、今後の活動への提案ともとれるものが多く出ている。

### 3. まとめと今後の課題

以上をまとめると、本交流活動は双方の学生にとって立場や国籍を超えた「協働」と「ピア・ラーニング」の場となった。前年度の課題に起因した活動前の取り組みもそれらに貢献した。また、タイ側ではタイ人学生同士の「ピア・ラーニング」のきっかけになり、日本語学習にも明らかな成果が見られた。日本側では大学院生2名が「協働」をその後専門分野に選択し、大学生たちには進路において大きく影響したという報告を受けた。特記事項として、日本人学生が活動初日に本大学の制服姿で現れたことも加えたい。このことでタイ人学生が親しみをもち、よりスムーズな活動開始の一助となった。

今後の課題としては、双方の学生が互いをより深く理解し、より積極的な「協働」を促す交流活動を検討したい。

#### 参考文献

池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』 ひつじ書房

(まつい いくみ チュラーロンコーン大学文学部)